

P1-C-0056

視覚・体性感覚情報の統合を目的とした認知運動課題によりすくみ足・小刻み歩行に改善がみられた 2 症例

西村 聡二¹⁾, 沖田 学^{1,2)}, 森下 敦史¹⁾

¹⁾愛宕病院リハビリテーション部, ²⁾高知大学大学院医学系研究科

key words すくみ足・認知運動療法・運動学習

【目的】

すくみ足・小刻み歩行はパーキンソン病(PD)のほか様々な疾患で観察され、大脳基底核の機能低下による内発的な運動の障害が誘因のひとつとされている。これらの歩行障害に対する介入方法として、視覚や聴覚といった外部刺激を利用した介入などが推奨されている。今回は、視覚と体性感覚情報の統合を基盤に、内発的な運動を促すことを目的とした認知運動課題を PD 及び脳血管性パーキンソニズムにより歩行障害を呈した 2 症例に対して実施した。その結果、歩行能力に改善がみられたので報告する。

【症例提示】

症例 1 は右頭頂葉を中心に多発性脳梗塞を呈した 80 歳代の男性である。発症前は PD とアルツハイマー病があり歩行自立レベルであった。症例 2 は脱水後廃用症候群によりリハビリ開始となった 80 歳代の男性である。既往として基底核を中心に多数の小梗塞が存在し、入院前よりすくみ足・小刻み歩行がみられていた。介入初期の運動機能として症例 1 は左側肢 Br-stage VI, 症例 2 は両側ともに上肢 VI, 下肢 V であった。歩行能力は症例 1 ではすくみ足・小刻み歩行により転倒傾向が強く 10m 歩行が困難で 5m : 20.0 秒 26 歩 15.0m/分であった。症例 2 は 10m free hand 歩行が 45.6 秒 85 歩 13.2m/分で、すくみ足・小刻み歩行が著明であった。

【経過と考察】

2 症例に対し、左右の身体・空間を比較しながら感覚情報を統合して運動へ繋げる課題を段階的に施行した。課題開始から約 1 カ月後の変化として、症例 1 は 10m T 杖歩行において 26.8 秒 40 歩 22.4m/分となり、症例 2 は 10m free hand 歩行において 24.2 秒 53 歩 24.8m/分と改善がみられた。感覚情報の処理は身体の認識や運動の改善に重要な因子とされており、感覚情報の統合とそれを基にした運動を促す認知運動課題により、2 症例において身体能力の向上がみられた。すくみ足・小刻み歩行に対し、感覚情報の統合を促すことで内発的な運動の基盤を構築し、歩行障害が改善する可能性が示唆された。